

「キリストに胸躍る」

エペソ人への手紙 4 : 7 - 10

October.22.2023

エペソ人への手紙 4 : 7 - 10 (パウロ)

Preface

今読みましたこの聖書箇所から、今日の説教題「キリストに胸躍る」という題を捻り出すのに、丸1日悩みました。

なぜならば、8 - 10節の御言葉をどう解釈していいのか、中々合点がいかなかったからです。

ここの聖書箇所は、8 - 10の御言葉が無い方が遥かに文章として滑らかで、理解しやすく、自然な流れのように見えます。

試しに、8 - 10節の御言葉を飛ばして、7節と11節を繋げて読んでみます。

エペソ人への手紙 4 : 7、11 (パウロ)

4章の1 - 7節まで、一つの御霊、一つのバプテスマ、一つの信仰、ただお一方なる神・キリストによって、私たち一人一人は召し出され、一つとされたことについて語ってきました。

そして、その一つとは、カッチカッチの生命力も弾力もない、命も通い合わずデコボコの一つもない画一的な大きな塊の一部になるということではなく、デコボコであってこそその霊的有機的繋がりであると、一人一人が特色あるそれぞれの役割と豊かさが尊重される存在として、キリストに恵みを賜わっている者たちだということでした。

そこで、その賜物の一例として挙げられているのが、11節にあります使徒だったり、預言者だったり、伝道者だったり、牧師、または教師という教会の指導的立場にある人たちの職分であり、一人一人に与えられた賜物の具体例として記されているわけです。

そんな文脈に突如として、一見すると前後の文脈にピタッと合っていないかのように見える旧約聖書の引用と、その旧約聖書の御言葉の深い意味に浸っている使徒パウロの個人的感慨のようにも見えてしまう8 - 10節の御言葉が挿入されています。

一度、7節から11節を通して読んでみます。

エペソ人への手紙 4 : 7 - 11 (パウロ)

文章がデコボコしていて、合致していない、一致していない、分かりにくい感じがしませんか？

でも、よくよく探っていきますと、そのデコボコがハーモニーであり、一致で

あり、unity であり、言わんとしていることに深みと彩りが増し加えられているのだということが見えてきます。

では、「なぜここに敢えて、8－10節の言葉を挿入したのか？」ということなのです。

Part One

使徒パウロは、自らが書いた他の手紙においても、よくこういう書き方をしています。

一見しますと前後の文脈に合わないように思える旧約聖書の言葉を引用しながら、その語っている内容に挟んでいきます。

で、それらの聖書箇所を良く探ってみますと、共通点があることを発見するのですが、その共通点が今日の聖書箇所にも良く表れています。

その共通点とは、「キリストに胸が躍っている」ということです。

キリストゆえに突如として胸がいっぱいになり、幸いと満足と希望に心満たされて、しかもその満たされ方が、自分勝手に自分の願うように神さまのことをイエス様のことを自分の中で作り上げているのではなく、聖書の御言葉、パウロの内に蓄えられている数多くの旧約聖書の御言葉に聖霊の光が照らされて、その御言葉にキリストを見出し、「ああ、あの聖書の御言葉の真の意味は主イエスだったのか！ イエス様に繋がるのか！ イエス様のことを語っていたのか！」と、エマオへの道すがら、死より復活された主イエス様から聖書の説き明かしを聞くうちに目が開かれ、心が内で燃えるような体験をしたあの二人の弟子たちと同じような感動に包まれたということなのです。

そして、その御言葉への悟りと感動を口にせずにはいられなくなり、私たちに一見すると関係ないかのように見える聖書の御言葉を挿入するのです。

でも、これがよくよく見ますと、関係なくなんかなく、むしろ、その御言葉の挿入が、前後の文脈の意味合いを太くし、豊かにし、明確にし、キリストの表われと恵みを浮き彫りにしていきます。

つまり、パウロ先生の旧約聖書の御言葉を引用した意図を探ることが、私たち読み手にとっても、神のなさった御業の奥深さだったり、緻密さや愛の深さを味わうことに繋がるということですね。

無駄だと思えるものの中に、いつでも豊かさが隠されているようなものです。

Part Two

このエペソ書4：8－10の御言葉、特に8節の旧約聖書の引用聖句は、詩篇68：18の御言葉の引用になります。

詩篇68篇に行ってみたいと思います。

詩篇68：18 (パウロ)

エペソ書4：8では、「彼は」となっているところが、ここ詩篇68：18では、「あなたは」となっています。

つまり、使徒パウロ先生は、詩篇のオリジナルの御言葉をエペソ書では言い換えて用いているということです。

詩篇68：18の「あなたは」とは、父なる神、主なる神様のことです。

でも、エペソ書4：8のパウロが言い換えている「彼は」は、父なる神様ではなく、イエス・キリストのことです。

即ち、パウロの中で、「旧約聖書に記録されている父なる主なる神様がなされたすべてのみわざは、主イエス・キリストがなされたことだ」と、「主イエスは、父なる神の現れである」という悟りに至らされているということです。

かつて使徒パウロは、旧約聖書を探求し、実践し、生き、人々に教え諭すことを生業とするエリート律法学者でした。

そんな過去のパウロにとって、クリスチャンたちが、「旧約聖書の神はイエス・キリストであり、イエス・キリストを見たことは父なる神を見たことであり、イエス・キリストの御言葉を信じる者たちは天地万物をお造りになった主なる神様の御言葉を聞いたことであり、イエス・キリストを信じることは旧約聖書の語る唯一の神さまを信じることだ」と宣べ伝えているということに、どうにもこうにも腹立たしく、神を侮辱しているようにしか思えず、クリスチャンたちを片っ端から取っ捕まえて、牢獄にぶち込み、処刑することに正義を見出していた程でした。

そんなパウロにイエス様が直接お声をかけ、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と、クリスチャンたちへの迫害をご自分への迫害と同じように捉えておられるイエス様に天から語り掛けられて、「主イエスは、主なる神の現れなるお方である」ということを否定の出来ない事実として、経験上悟らされていきます。

そしてさらに、その経験を裏付けする文書的根拠として、旧約聖書の言葉が主イエスのことを語っているのだという霊的悟りへと導かれて行きました。

ある意味不思議なことです。

今ちょっと読んだだけでは、私たちには何の変哲もない言葉のように感じてしまうような御言葉が、パウロには、その心の内に照らされた聖霊の光によって、この御言葉がキリストをあらわす言葉として迫っていきます。

私たちにも同じようなことが起こります。

先週の話ではないですが、何てことなかった聖書の御言葉が、ある日突然我が事のように迫ってくる場合があります。

また、なんてことの無い日々の日常生活のルーティンのようなことに、神の御手とともに幸いを感じる場合があります。

痛くて、辛くて、苦しくて、納得のいかない自分の計算とは合わないことが目

の目に広がっていたとしても、そこに神の愛を、神の御手を、神のご計画を悟らされる時があります。

生々しい神の御手が私の体に触れ、私のすぐ傍で私を担い、諭し、恵みを施し続けておられる主イエス様を感じる時があります。

そして心の中に、頭の中に天の御国の感動が溢れ、「ああ、幸いだ」と、「今あるもので十分満足だ」と、「神は痛みや苦しきさえも適材適所にお与えくださり、お金があろうと無かろうと、今で十分満足だ」と、「神の恵みが満ちあふれるところをこれまで歩ませて頂き、これからも歩ませて頂く」と思える時があります。

聖書を読んだ時、御言葉を暗唱した時、神さまのことを考えていた時、または礼拝の時間を通して、あるいは何てことない子供の喜んでる姿を見たり、妻が夫が友人が仲間が喜んでる姿を見たりしますと、突然、「ああ、聖書の御言葉は本当だ！」と思えるような霊的感動に包まれることがあります。

今まさに、パウロは、そのような霊的感動をこの詩篇 68 : 18 の御言葉に感じているのです。

Part Three

この詩篇 68 篇はダビデの詩ですが、ダビデが到底勝つ見込みのない敵軍との戦いに勝利した後、その勝利が自分の力や自分が率いた軍隊の力ではなく、「ひとえに神さまの助けによるものである」と、「その戦いに主なる神様がご介入下さったからこそその勝利だ」と、賛美している詩です。

特に、エペソ 4 章でのパウロのこの詩篇の引用の仕方を見ますと、「いと高き所へ上った」という内容に心惹かれています。

ちょっと行ったり来たりして申し訳ないのですが、詩篇に手を入れて頂いて、もう一度エペソ書に行ってみます。

エペソ書 4 : 8 - 10 (パウロ)

戻って詩篇 68 : 18 をもう一度見ますと、

詩篇 68 : 18 (パウロ)

「あなたはいと高き所に上り」とありますが、「上り」と言うからには、下って来られた、下りて来られたということです。

つまり、父なる主なる神さまは、生まれる前から罪ある者として母の胎内で身ごもられたような私たち罪まみれの罪人が、生身で、肉に属したままでは到底行くことの出来ない、神がおられるべきところである高き所から、この罪なる世界にわざわざ下りて来てくださって、ダビデの戦いに、ダビデへの愛を示すためにあたかもご自分の戦いであるかのように参与して下さり、勝利へと導いて下さったことが恐れ多くて仕方のない恵みだというわけです。

しかも、その勝利の仕方が、神ならではの方法だと言うのです。

どういう方法か？

「あなたは捕虜を引き連れて、いと高き所に上り」というように、ダビデが勝つ見込みのない戦いに勝利した理由は、「神が、目には見えねども、目に見える不確かな肉的なものよりも確かな神の御手で捕虜、即ち、敵を引っこ抜き、神自らその敵を連れて上って行かれ、根こそぎその戦いの要因となっていた対象を解決されたんだ」と詠います。

さらには、「頑迷な者ども」と自称しなければならない程の罪人であるダビデを含めたイスラエルの民たちには、ただただあわれみと、神の偏愛としてしか表現のしようのない程の恵みを、贈り物をお与え下さったと驚愕するわけです。

神が、あたかも偏愛なざる神であるかのような誤解を人々に抱かせてしまい兼ねない行為までなさりながら、ダビデを救い出して下さった。

その肉的で世的な戦いの勝利に、この世での、この世界での勝利や繁栄や上手くいったというようなことを喜ぶのではなく、その先にある、霊的世界の勝利を見据えたということですね。

そして、このダビデの詩から、「このダビデの経験がダビデ一人の経験に留まるものではなく、イエス・キリストを信じるように導かれ、キリストをかしらとするキリストのからだ一つ一つの部位となる特権を賜わったキリスト者一人一人と重なる」とパウロは事新たに悟らされ、語るわけです。

確かに主イエス様は、サタンの権勢を根こそぎ引っこ抜き、彼らの最大の攻撃であり最大の武器である死を無き物とするためにこの地に下りてこられ、十字架に架かれ、そして復活し、天の御国の最も高いところへと再び上られ、愛する者たちに死んでも生きるまことの命を回復させ、復活へと導き、この世の条件や状況に左右されない真の祝福へと、真の豊かさへと、今は目には見えねども、やがてどの肉眼でも見ることの出来る確かな御国へと、私たちを引き入れなさるといふわざを成し遂げられました。

私たちを御国へと引き入れるどころか、ヨハネの黙示録では、キリスト者そのものを「王国とした」とまで仰るほどに、私たちの存在なしの神の国はあり得ないともして下さいました。

キリストの量りに従って私たち一人一人に与えられた恵みと賜物は、私たちが考えるよりもはるかに高く、また深く、展望豊かな満たしが約束されていることなんだということを、詩篇 68 篇のダビデの詩を用いて、使徒パウロ先生は表現したかったわけです。

Part Four

また、この詩篇 68 篇を詠うダビデも、後に来られるイエス・キリストの御業を何らかのかたちで、神から示されていたらうと思われる箇所があります。

詩篇 68 : 4 (パウロ)

「雲に乗って来られる方のために道を備えよ。」

「雲に乗って来られる方」という表現は、「ダビデの時代から900年後にこの地に天から下りてこられるために人としてお生まれになったイエス・キリストが、再びこの地上に、信じる者たち信じていない者たちを含めた、造られしすべての被造物の前に現れなされる時のイエス様の姿だ」と、新約聖書に書いてあります。

マタイの福音書 24 : 30 (パウロ)

マタイの福音書 26 : 64 (パウロ)

ヨハネの黙示録 1 : 7 (パウロ)

ダビデにも、イエス・キリストの現れが、神より示されていました。

そして、そのことを書き残し、その書き残したダビデの詩にパウロが共鳴し、その共鳴を引き起こされたお方が、父なる神、御子なるイエスがお与えくださった最上の贈り物として来てくださった聖霊です。

聖霊なる神です。

聖霊なる神さまによって、パウロの心の内にある聖書の言葉に光が照らされ、詩篇 68 : 18 の御言葉がイエス・キリストを表しているんだという霊的悟りを与えられたわけです。

ヨハネの福音書 14 章に行きますと、「捕虜を引き連れて行く」、つまり、イエス様がサタンどもの策略を木っ端微塵に打ち砕くという御業を完遂されたことが確かなものであることを、私たち心の鈍い者たちに確信づけて下さるお方として聖霊様をお送りになると約束して下さいましたが、正に、その聖霊様によって、パウロは詩篇 68 篇の御言葉が成就したことに、心躍るわけです。

ヨハネの福音書 14 : 6-7、10、15-17、23-27 (パウロ)

ダビデが詠った詩、使徒パウロがその詩に霊的感動を覚えた理由を、今読みましたヨハネの福音書 14 章の中で、イエス様がすべて語っておられます。

父なる神がイエス・キリストとともにおられ、イエス・キリストは父なる神と同じ神であられ、また、父なる神が、イエス・キリストがお語りになった言葉の全てが神の言葉であるという悟りを私たちの内に、時に適って芽生えさせて下さるために来て下さったお方が、私たちキリスト者の内に内在して下さいようになられた聖霊なる神だと仰るのです。

第一コリント 12 章に行ってみますと、同じ聖霊によって、ただお一方なる御霊によって与えられているのが、私たちそれぞれに与えられている多種多様な

職分や賜物であり、タラントであり、共に一つとなってキリストの満ち満ちた身丈にまで達するために賜わっているものだと言っています。

Conclusion

使徒パウロは、キリストの賜物の量りにしたがって、私たち一人一人に与えられた恵みを考えた時、突如として、「キリストが私たちのために、死なれるために下って来られ、再び天に昇って行って下さったからこそ、その証しとして聖霊が与えられ、賜物が与えられ、キリストをかしらとするキリストに繋がる一つのからだとされるといふ神秘・奥義が実現したんだ」と、「すべては、キリストの犠牲と復活ゆえにある恵みなんだ」と、「キリストの犠牲と復活ゆえにある私たちの存在なんだ」と、「すべては、キリストの犠牲と復活という私たちには到底計り知ることの出来ない祝福ゆえなんだ」ということを、今一度、詩篇68：18の旧約聖書の御言葉をもって気付かされたわけです。

そのキリストに胸躍る感動のあらわれが、今日の聖書箇所です。

御言葉を通して、キリストに胸躍る私たちでありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ4：10